

(題字・三輪休和)

127号 最終号

2020年7月発行

「月刊いつものギャラリーさん」休刊のお知らせ  
 平素のご愛護誠に有難うございます。ご愛読いただきまして月刊誌「いつものギャラリーさん」は今回の7月号を最後に休刊させていただきます。これからもお客様にお喜びいただける企画を新たな力たちで、情報発信していきますのでご期待ください。2009年9月の発行以来、11年間ご愛読ありがとうございました。お客様各位 店主 拝

水	1	先負・半夏生
木	2	仏滅
金	3	大安
土	4	赤口
日	5	先勝 <span style="color:red">定休日</span>
月	6	友引
火	7	先負・小暑・七夕
水	8	仏滅
木	9	大安
金	10	赤口
土	11	先勝
日	12	友引 <span style="color:red">定休日</span>
月	13	先負
火	14	仏滅
水	15	大安
木	16	赤口
金	17	先勝
土	18	友引
日	19	先負 <span style="color:red">定休日</span>
月	20	仏滅
火	21	大安
水	22	赤口
木	23	先勝・海の日 <span style="color:green">文月茶会</span>
金	24	友引・スポーツの日 <span style="color:green">文月茶会</span>
土	25	先負 <span style="color:green">文月茶会</span>
日	26	仏滅 <span style="color:green">文月茶会</span>
月	27	赤口
火	28	先勝
水	29	友引
木	30	先負
金	31	仏滅

7/

23 24 25 26  
 木 金 土 日

# 文月茶会

## 茶道具正札市

final summer bargain

二階「松華軒」

10:00am ~ 4:00pm



玄甲舎八畳間



亀甲形の蹲踞

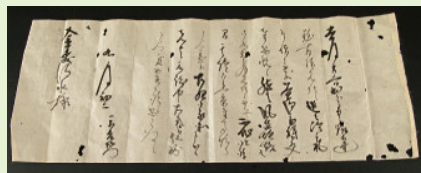
### 玉城町指定文化財「玄甲舎」新装公開

弘化4年(1847年)、田丸城主久野丹波守(くのたんばのかみ)の家老金森得水(とくすい)によって設計・建築された「玄甲舎」は、茶室・迎賓用を兼ねた数寄屋と、家族が生活を営む居宅で構成された数寄屋造りが特徴です。築後170年が経過した玄甲舎は、2013年玉城町が文化財に指定、実地調査・修復事業に着手、完成まで7年の年月を費やした。朝日新聞創業者である村山龍平翁(玉城町出身1805~1933)も幕末期に得水と交流があったとされている。玄甲舎の由来は、得水が亀を好んだことから、亀の姿に似せて作られたと伝わっている。また玄甲舎の八畳間炉壇の蓋には「大工庄五郎作 弘化四年丁未春日出來」と記されており、築造に携わった大工・庄五郎の建築では全国で唯一の遺作とされている。庄五郎は「残月亭」や「不審庵」などの茶室を再建した人物で、日本の数寄屋建築の文化遺産と言える。

### 金森得水と表千家10代吸江斎・11代碌々斎・楽旦入・慶入との交流

長次郎新選七種 黒茶碗、「閑居」「針屋」「ムキ栗」「村雨」「風折」 赤茶碗、「太郎坊」「二郎坊」

長次郎新選七種は、長次郎七種、長次郎外七種とは別に、金森得水が選定したもの。得水著の日本陶磁器の解説書、本朝陶器攷證(ほんちょうとうきこうしやう)に、「長次郎作にて、高名の茶碗、七種の外にもあまた有るべし、其中にて其形の始といふ茶碗を選出し、得水撰新組七種とは、写しは旦入、箱書付は吸江斎なり、猶此餘に其形の始原といふべき、茶碗あるべけれど、あり来りの七種にならひて、先七ツをえらびたるなり」の記載がある。旦入は、徳川治宝・斉順侯の御庭焼・清寧軒窯創設に従事し、了入・慶入と共に紀州に赴いている。また、吸江斎は10歳で紀州家へ出仕、19歳で治宝公により台子真点前の皆伝を授かる。また得水も、吸江斎より皆伝を受け、慶入と親交が深く、長次郎新選七種を写させている。内箱蓋表には得水、蓋裏には碌々斎書付。外箱蓋裏に「玄甲舎老新撰 長二郎作写 新組七種茶碗 楽吉左衛門印」と慶入共箱がある。またこの茶碗には、碌々斎が得水に宛てた手紙が双添う。「貴書忝致拝見候 暖和相成候處彌御安全被成御入珍重御儀奉存候 然は職人江之御状早速相達申候 一、吉左衛門方へ新組七種之茶碗被仰付候由 右箱蓋うらへ書付之儀洋翁相認候通七箱とも相認候様御申越 猶吉左衛門よりも委細承可申候 先は各貴答迄 草々不具 三月七日 碌々斎 玄甲雅主」ここで長次郎新選七種を見ることにします



楽宗入 赤楽灰器  
 金森得水箱  
 楽旦入書状添

¥120,000



ムキ栗

東京国立博物館  
 文化庁分室蔵



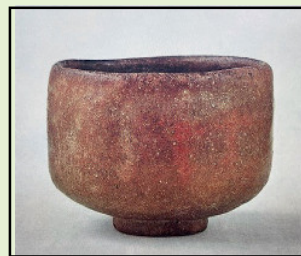
村雨

楽美術館蔵

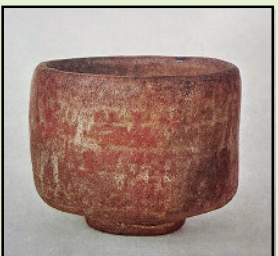


風折

閑居 高台の内朱漆利判あり。宗旦→藤村庸軒→海部屋宗雪→大阪鴻池家  
 針屋 利休が針屋宗春に贈ったことからこの銘がある。別名針屋黒。随流斎→瀬尾道甫  
 ムキ栗 長次郎の中での唯一の四方茶碗。利好の四方釜と共通性がうかがえる。  
 山田宗徧→覚々斎銘→後藤三郎衛門→同宗伴→平瀬家→文化庁  
 村雨 長次郎の筒茶碗の中で唯一高台が基筈底になっている 如心斎箱  
 風折 宗旦銘で、胴にくびれあり、その形を風折烏帽子に見立ててこの名がある。  
 かつて胴に宗旦直書があったが、現在は朱漆が点在するのみ。  
 太郎坊 利休が愛宕山の太郎坊に送り、ふたたび所持し、宗旦に伝わる。庸軒が銘。  
 二郎坊 太郎坊があることから、その兄弟の意味か。宗旦所持 随流斎箱



太郎坊



二郎坊

胴にもわずかにまるみを持たせた姿は「大クロ」に似る

引入し 茶のけんそくのおおければ世に鼻高の二郎坊との作者不明の狂歌添う

.. 編集の窓 ..



御浜町にて

photo by S.A

み熊野の 浦の浜木綿 ももへなす  
 心は思へど ただに逢はぬかも  
 万葉集 柿本人麻呂

浜木綿 はまゆう  
 梅雨明けで夏の風を感じる頃、紀州に向かう海岸沿いでよく見かける神道神事で用いられる白い布をゆうと呼ぶが名の由来は、花がこの木綿(ゆう)のように白く垂れることから。また 葉が万年青に似ているから「浜万年青」(はまおもと)ともいわれている三重県では紀伊長島町。お隣の和歌山県では新宮市、太地町、すさみ町と、それぞれに市の花・町の花に指定されている



ギャラリー森田ホームページ  
 左記のQRコードを読み込みアクセスしてください！  
 スマホでご覧いただけます

ご案内



Instagram